

その22 大正期農業の移り変わり

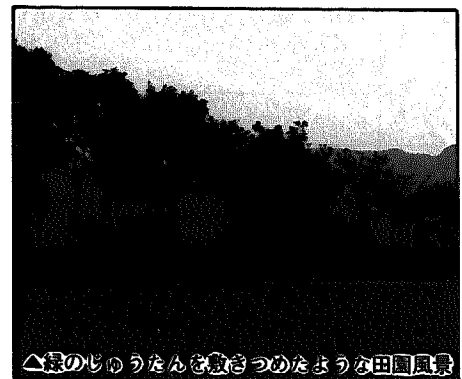
■今月の「ふるさと再発見」シリーズ第二十二回目の今回は、本村の基幹産業である農業が、米作中心から今日のような商品作物栽培をも取り入れた農業経営へと移り始めてきた大正期の動向についてご紹介しましょう。

大正期に入って、やっと、公的な場で商品作物栽培のより一層の工夫研究の必要性が自覚されるようになってきました。従来、本村では水田適地が少なく畑作の多かった間瀬地区は別として、岩室、和納の両地区では米の商品化を除いて他の果実や野菜類は栽培していたものの、そのほとんどが自家用中心でした。

ところで、岩室地区（旧岩室村）の大正期の主要農産物生産高（表1）を見てみると、米の生産が多いことは水田耕作を主とする岩室農業としては当然のことですが、表からは米の生産高を生産価格に換算した場合の推移と、生産量の推移とが大きく違うことが見受けられます。これは、当時の米価が自由価格であったことから、需要と供給の関係で生産量と生産額の数値がしばしば逆転したこともあったといえます。それに他の麦、大豆なども例外でなかったようです。このことは、要するに農業生産も単に増産だけでは通用しない資本主義経済のわくにはめこまれていたからで、ただ多くの農民たちはそれへの対応策が後手にまわり、大正期の急激な経済発展の中でたちおかれていったことが商品作物の栽培などの姿にみられたようです。

しかし、耕地が少なく米すら移入しなければならなかった間瀬地区では、和納、岩室にくらべて最も貨幣経済に依存せねばならず、その貨幣獲得のためにも漁業収入はもちろんのこと、残りの不足分を農産物販売収入から補うため畑作物の商品化及び増産への意欲が強かったようです。

●農業技術改善への努力
大正期の農業技術は、明治期以来ゆっくり



△景のじゆうたんを数さつめたような田園風景
(表1) 岩室村における米の生産高の推移(『岩室村史』)

整加工作業の機械化が特にめざましく、大正末期から昭和初期にかけてほとんどが部落農民共同の力で機械化されていきました。

●農業への動力機導入
農業に動力機が使用されたのが、大正五年に西船越の揚水機用モーターとして設置されたのが最初といわれています。これ以後、大正末期から昭和初期にかけて次々と設置されていきました。

と向上してはきましたが、今日からみればまだまだ多くの遅れた面をもち、多くの人力を利用した集約農業の段階でした。しかし、大正五、六年頃から千歯に代る足踏脱穀機が次第に普及し始めたことや明治期に導入された馬耕技術が大正期を通じて大きく普及したこと、それに運搬用具として馬や番取にまじって荷車などが使用されだしたことが大正期の新しさといえるようです。また、米の調

ましたが、農家の人たちの労力軽減には大きな成果がありました。このような作業場の中に電動機利用の調整機を設置することは、昭和二年に西中地区の組合で行われるなど、昭和初期に入って次第に広がり、大字単位の農民の共同の力が、動力機導入という農業機械化の面でも大きな役割をはたしていました。

(今回ご紹介した内容は、「岩室村史」の中から抜粋して掲載したものです)

参加者募集
母子父子家庭 慰安事業
県の委託事業として毎年実施されている母子・父子及び交通遺児家庭慰安事業が、こしも次のおり開催されます。母子・父子及び交通遺児家庭の方であれば、会に加入されていない方でも参加できます。

■とき：9月26日(日) ■行き先：安田アイランド ■参加費：500円 (一世帯につき) ■申込締切：9月3日(金) ■申込み・お問合せ先：岩室村社会福祉協議会(役場内 ☎82-141-1 内線112) 又は、母子福祉会長・木部ウメ子(☎82-11130) さんまで。

「電気の安全」をたもつための正しい使い方

良い電気設備で安全に正しく使って明るく暮らし

(財) 東北電気保安協会

お詫びします
広報7月号8ページの成人式の名簿中、笠巻純(和納三田)さんの名前が竹司さんとなっていました。また、13ページの竹内秀二さん純子さんの住所が夏井(正しくは和納5区)となっていました。訂正し、深くお詫び申し上げます。